

巻頭言

21世紀への飛躍に向けて

理事 大西 英雄

内需振興、景気対策等から公団の建設事業費はほぼこの5年で倍増に近い伸びを続ける一方、本年度から愈々湾岸線南伸2期工事が関西新空港開港時を目指して本格的に着工される大事な時期を迎えております。丁度、千里万博の前もこのような状態であったそうです。当時とちがって地元交渉も何かと難しい昨今現場の御苦勞は並大抵ではないと思いますが、一段の御健闘をお願い申し上げます。

一方来年度から第10次道路5ヶ年計画が発足しますが、今世紀末へかけて淀川北岸線（第一期）を皮切りに第2環状線、阪神南北線、湾岸線の西伸、大和川線、京都線等の事業化の気運も高まって参りました。いづれも密集市街地、住居地域等に計画されており、時代の趨勢から推して、その実現には大変な困難が予想されます。

振り返ってみますと公団発足以来の25年間は、約一世紀にわたる近代化が峠に達し、国際化、情報化、ハイテクノロジーの進展の中で工業化社会から一転して、新しい文明社会へ模索の航海が始まった激しい変化の時期でありました。当京阪神地域においても、その舞台となる都市構築のグランドデザインも構想を新たに官民一体となった推進の機運が生まれています。大阪21世紀計画もその一つですが、これらの計画はいづれもハード・ソフト両面にわたって心の豊かさ“潤い”ある生活へのニーズを背景に文化、交流、情報の場としてアメニティの向上が大変重視されています。

ところで、都市のオープン・スペースの実態を大阪市を例に昭和60年（40年）についてみてみますと、総面積は市域面積の約5%の9,100ha(10,000ha)であり、その内訳は道路敷3,900ha(3,100ha)、河川水面2,000ha(2,500ha)、公園緑地

1,000ha(400ha)、農地または空地1,900ha(3,700ha)、軌道敷等300ha(300ha)となっております。オープン・スペースは大都市のアメニティにとって貴重な空間ですが、大阪の場合、土地の高度利用、高地価から農地または空地の減少によって総量は減少気味であり、増加の顕著なのは道路となっております。従って、オープンスペースとして公園緑地とともに道路空間のあり方は、都市のアメニティに大きな影響を与えることは否めない所であります。私共の新しい計画は、こうした状況の中にアメニティと2者択一ではなく、都市デザインの中に新しい蓄積としてくみこまなければならないと思います。皆さんの豊富な経験、幅の広い発想や創意の結集によってこれらの計画に息吹が与えられることを期待して止みません。